Ⅳ章　道徳の時間の取り組み

平成27年３月，小学校学習指導要領の一部改正が行われ，「道徳」は「特別の教科　道徳」となり，平成30年度より全面実施されることとなった。それは，現実の困難な問題に対して，子どもたちが主体的に対処できる力を育成する上で，道徳教育が果たすべき役割の大きさを示している。そして，その要となる道徳科の授業においては，答えが一つではない道徳的な課題を自分自身の問題として捉え，考えたり，議論したりすることが求められているのである。

本校では昨年度より，「他者との関わり」に焦点を当て，対話を通して道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる授業づくりに取り組んできた[*1]。例えば，話し合いを通して内面的な葛藤や感動等を体験し，道徳的価値の自覚を深めていく授業づくりを行うことで，道徳性を発達させていこうと考えたのである。

さらに本年度は，道徳の時間における評価方法の研究を加え，子どもたちが自己の心の成長を実感できるような評価方法の工夫に取り組んできた。

本章では，昨年度からの取り組みによって明らかとなってきた「対話における支援の要件」と，「評価方法の留意点」について述べる。

１　対話における支援の要件

話し合う機会を充実することの重要性について，小学校学習指導要領では，指導における配慮事項として以下のように示されている。

自分の考えを基に，書いたり話し合ったりするなどの表現する機会を充実し，自分とは異なる考えに接する中で，自分の考えを深め，自らの成長を実感できるように工夫すること。 （文部科学省，『小学校学習指導要領』，2008年，106頁）
児童が多様な感じ方や考え方に接する中で，考えを深め，判断し，表現する力などを育むことができるよう，自分の考えを基に話し合ったり書いたりするなどの言語活動を充実すること。 （文部科学省，『小学校学習指導要領（文部科学省ホームページ公開）』，2015年，97頁）

このことから，道徳の時間においては話し合う活動が重要であり，本校が重視している対話の重要性はこれからも変わらないものであると言える。そして，「自分の考えを基に」，「自分とは異なる考えに接する」，「多様な感じ方や考え方に接する」ということばが対話における支援の鍵になると考える。

（１）体験・経験を生かして，自分と資料をつなぐ

対話を通して，子どもたちが自分の考えを深めていくためには，一人一人がしっかりと問題に向き合い，自らのこととして考えることが必要である。そのためには，体験・経験を基にした授業づくりが有効であることは明らかであろう。授業においては，資料を共通の素材としながら，子どもたちの体験・経験を生かして，子どもたち自身と資料がつながるような支援を教師が行うことで，子どもたちは登場人物に自分を重ね合わせながら対話を行い，考えをより深

*1　本校では，道徳の時間における研究と，Ⅰ～Ⅲ章の教科における研究とは，別の枠組みで進めているが，対話については共通の定義（本書２頁）を設定している。

めていくと考える。

①　授業の中での体験的活動を生かして，自分と資料をつなぐ

子どもたちが授業の中で，資料と関連した体験を共通に行っておくことで，その後の対話において，その体験を基にしながら自らのこととして感じたことや考えたことを話し合えるようになると考える。以下に，授業の中での体験的活動を，後の対話につなげていった実践を紹介する。

第１学年実践　「だれにでもやさしく（２－（２））」

【資料名】「はしの上のおおかみ」（文部科学省『わたしたちの道徳』１・２年生）

【本時のねらい】おおかみが優しくなれた理由を考えることにより，相手に対する思いやりや親切な心をもち，実践しようとする態度を育てる。

【体験と資料をつなぐ支援の実際】資料には，橋の上で通せんぼをして他の動物を困らせる自分勝手なおおかみが登場する。子どもたちは資料を読み，「おおかみが優しくなれたのは，自分が優しくしてもらってうれしかったからだ」という考えをもった。その後，日頃からプリントを渡す際に行っている「どうぞ。」「ありがとう。」を体験させた。ふだんから行っていることではあるが，黙って渡されるよりも，優しく「どうぞ。」と言われて渡されるといい気持ちがすることや，「ありがとう。」と言われるとうれしくなることを，より実感することができた。そして，おおかみに手紙を書く活動を行った。ここでは，資料の中のおおかみへのことばだけでなく，先ほどの体験等，自分が優しくしてもらってうれしかった体験を振り返りながら，これから自分が頑張りたいことについても書き，書いたことを基に対話を行った。

【プリントを受け渡す体験】

本実践では，授業の中でプリントの受け渡しを実際に行うという「今，ここでの体験」によって，子どもたちが親切にされる者の気持ちになることをねらった。実際に，学習前には乱暴に受け渡しをしていた子どもも，学習の中では優しく受け渡す体験ができた。それにより，資料に登場する，優しくなれたおおかみの思いに通じることができたのではないかと考える。そして，対話を通して自分の感じたことを表現するとともに，友達がこれから頑張りたいと考えていることも知ることができたのである。

他の実践においても，「あいさつ」を授業の中で体験させることで，資料に登場する，自分からあいさつをするようになった主人公に自分を重ねながら，あいさつをした時に感じた思いを交流することができた。

【あいさつの体験】

②　写真や図等から想起された経験を生かして，自分と資料をつなぐ

子どもたちは，資料と類似した経験をしていても，それを思い出せなかったり，資料と類似したものだと認識していなかったりする場合がある。そこで，子どもたちのこれまでの経験を，写真や図等の視覚的な支援によって想起させることで，自分と資料をつなぎながら，後の対話に生かせるようになると考える。

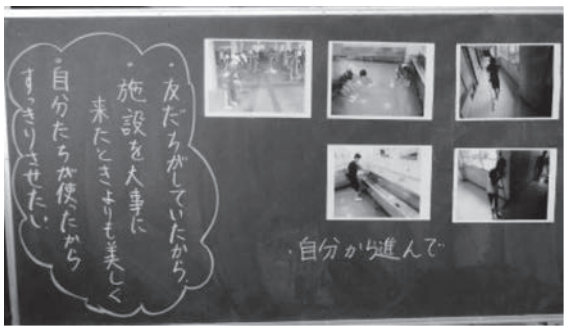
まず，写真を用いて経験を想起できるようにした実践を紹介する。

第５学年実践　「役立つ喜び（４－（４））」

【資料名】「なかよし広場」（香川県小学校道徳教育研究会『わたしのいく道』５年）

【本時のねらい】人のために役立つ喜びを知り，学校や地域のために役立つことを進んでしようとする心情を育てる。

【経験と資料をつなぐ支援の実際】資料には，公園のごみ拾いに対して嫌だなと思っていた主人公が，すがすがしい気持ちで他の人のごみまで拾うようになる姿が示されている。本実践では，子どもたちが共通に経験している集団宿泊学習において，自分から進んで宿泊棟や活動場所の清掃をしている子どもたちの写真を提示した。そして，実際に清掃をしていた子どもたちからその時の気持ちを聴くことによって，主人公の思いに近づいたり，進んで人のために行動することの大切さには気付いていても行動できないという葛藤を自分のこととして実感したりすることができた。その後の友達との対話を通して「自分の行動が人の役に立っているんだな。」「友達も頑張っているんだから，自分も負けないように頑張らなければ。」と，実感をもって話し合うことができた。



【宿泊学習での経験を想起させる写真】

本実践では，子どもたちの集団宿泊学習での経験が，写真によって想起されている。子どもたちは，資料に登場する主人公に自分を重ね合わせながら対話していったと考える。

他の実践においても，授業の初めに，生活科で野菜や生き物の世話をした際の写真や記録を振り返ることで，その時の気持ちを想起しながら，資料の主人公が生き物を大切にしているときの気持ちについて対話を行うことができた。

次に，図を用いて経験を想起できるようにした実践を紹介する。

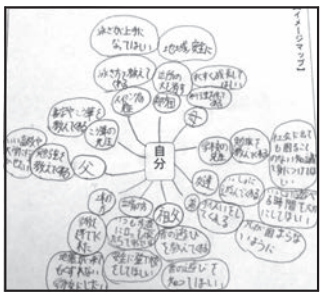
第６学年実践　「支え合いや助け合いに感謝して（２－（５））」

【資料名】「黄熱病とのたたかい」（文部科学省『私たちの道徳』小学校５・６年）

【本時のねらい】日々の生活が人々の支えや助け合いで成り立っていることに気付くとともにそれに感謝し，応えようとする意欲を高める。

【経験と資料をつなぐ支援の実際】前時，子どもたちは，資料「黄熱病とのたたかい」を基に，「なぜ野口英世が，体調が悪いにもかかわらず，アフリカに渡航して研究を続けてきたのか」ということを探った。英世を支えてきた人々を「英世」の周りに位置づけ，どのように英世を支えたのか，それぞれの思いをつなげてイメージマップに表した。そうすることによって，「英世の将来のため」「才能を生かしてほしい」「すばらしい医者になってたくさんの人たちを助けてほしい」等，人々の思いが可視化され，命を懸けて研究を続けた英世の思いに迫っていった。

【野口英世のイメージマップ】



【自分のイメージマップ】

本時は，日々の生活の中で，自分を支えてくれている人々を自分の周りに位置づけ，どんなことで支えてくれているか，支えてくれている人の思いをつなげてイメージマップに表した。そのイ

メージマップを基に対話を行うことで，自分を支えてくれている多くの人々の存在に気付き，「支えてくれている人の思いに応えて，勉強をしっかりと頑張っていこう」等と，考えが深まっていった。

本実践では，これまでの自分の経験の中から，「人にしてもらったこと」に焦点を当てて想起し，野口英世の生き方とつないで，対話の基となる自分のイメージマップをつくっていった。そして，イメージマップによって，「支えてくれる人は違っても，同じ思いで支えてくれている」といった共通点に目を向ける対話へとつなげていくことができたのである。

このように，写真のような視覚的な支援の工夫に加え，より抽象的な図等に表す方法によっても経験を想起させることができると考える。ただ，先に挙げた実践においては，「支えてくれている人の思い」は子どもたちの経験からの想像であったことに注意する必要がある。そのため，朝の交通立哨を行ってくれている副校長先生の思いを，授業の中で実際に聴く活動を設定した。このように，抽象的な図等に表して経験を想起しながらも，子どもたちが事実を基に自分のこととして考えられるように留意することが大切である。

【副校長先生の思いを聴く】

以上のことをまとめると，道徳の時間の授業において，体験・経験を生かして，自分と資料をつないで対話を行えるようにする支援の要件は次のようになると考える。

授業の中での体験的活動を生かしたり，写真や図等の利用といった視覚的な支援を行い，経験を想起させたりする。

（２）集団内の異なる立場の存在を明らかにする

対話を通して多様な感じ方や考え方に接するためには，まず集団内に多様な感じ方や考え方があることを明らかにすることが大切である。以下に，アンケート等によって集団内の異なる立場の存在を明らかにし，後の対話につなげていった実践を紹介する。

第３学年実践　「友だちと互いに理解し合って（２－（３））」

【資料名】「同じ仲間だから」（文部科学省『わたしたちの道徳』小学校３・４年）

【本時のねらい】自分たちの運動会や体育の時間における体験・経験とつなぎながら，「勝ちたい」という気持ちと「みんなで一緒にしたい」という気持ちの両方を大事にしようとする態度を身につけられるようにする。

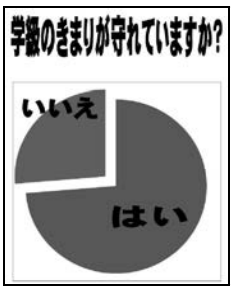
【異なる立場の存在を明らかにする支援の実際】事前アンケートにおいて，体育の時間に嫌なことを言われた経験を調査していた。本時において，回答の中の三つを提示すると，特に，仲間外れにつながるようなことばに対しては，「えー，それはないよね。」という反応が多く出た。アンケートは，学級集団内における「嫌なことを言われたことがある子」の存在を明らかにする上で，効果的であったと考える。ただ，学級内には，そのようなマイナス面ばかりが見られるわけではない。本実践の終盤，今現在練習している縄跳びの様子をビデオで見せた。ある女の子が縄に引っ掛かった時，

【ビデオから学級のプラス面に気付く】

「おしい！おしい！」「ドンマイ！」と，複数の子どもたちが口々に言っていたのである。このように，クラスには今，プラス面とマイナス面の両方があり，そのどちらにも向かう可能性があることを意識させ，考えを深めるきっかけとすることができた。

本実践では，アンケートによって，自分とは違う感じ方や考え方をしている友達の存在が明らかとなっている。子どもたちは自分と他者の回答を心の中で比較し，その違いに驚きの反応を示しているのである。「嫌なことを言われたことがある子」の存在は資料の中だけのことではなく，自分たちの学級のこととして重なり，その後の対話が実感を伴ったものとなっていったのである。なお，このようなマイナス面を明らかにすることは，悲しい思いをした子どもが疎外感をもったり,学級の雰囲気を悪く捉えてしまったりすることにもつながる可能性がある。アンケートによって明らかとなることには，プラス面とマイナス面の両方の存在があることを教師は理解し，どちらかに偏りすぎたり，マイナス面によって子どもが傷ついたりすることのないように留意する必要がある。また，学級の諸問題の解決が授業の中心課題とならないように留意することも必要である。道徳の時間が，特別活動における学級活動とならないようにしなければならない。なお，本実践においては，ビデオを見せるという視覚的支援によって自分たちの経験を想起し，その中から道徳的に価値ある言動に気付けるようにもしている。

他の実践においても，「学級の決まりが守られていない」と多くの子どもが実感しているにもかかわらず，一方では「自分は決まりを守っている」と多くの子どもが感じているという結果を円グラフで示し，子どもたちの認識のずれを明らかにした。そうすることで，「自分は決まりを守れていると答えたけれど，そうではなかったかもしれない」と自分の回答を振り返り，決まりを守れていない側から考えを深めていくきっかけとなった。



【グラフで示す】

このように，資料と関連のあるアンケート等を実施し，その結果を提示することで，子どもたちは自分の回答を振り返るとともに，自分とは違う回答をした友達の存在に気付くことができたのである。

以上のことをまとめると，道徳の時間の授業において，集団内の異なる立場の存在を明らかにする支援の要件は次のようになると考える。

アンケート等により，結果のプラス面とマイナス面の両方に留意しながら，集団内の異なる立場の存在を明らかにする。

（３）多様な価値観に出合ったり，自分の考えを価値づけたりできるようにする

道徳の時間において，それぞれの考えの道徳的価値を深く理解したり，答えを決められない葛藤や迷い，人間の心の弱さ等を実感したりするためには，対話において自分とは異なる感じ方や考え方に接することが必要であると考える。

まず，対話における対立軸を明確にし，名札を用いて自分の立場を明らかにすることで，自分とは異なる考えに接することができるようにした実践を紹介する。

第４学年実践　「友達を思う心（２－（３））」

【資料名】「絵はがきと切手」（香川県小学校道徳教育研究会『ともに生きる』４年）

【本時のねらい】相手を思いやる心の大切さに気付き，友達を大切にしようとする心情を育てる。

【対立軸を明確にした対話の実際】資料に登場する主人公は，友達からの料金不足の絵はがきに対し，どう返信するか悩んだ末，料金不足を伝える決心をする。授業では，この決心をする部分を削除したものを配布した。そして，「言わなくてもよい」と主人公に助言する母と，「言うべきだ」と迫る兄のどちらに賛成かを問うた。こうすることによって，学級集団の対立軸を明確にした。その後，理由を述べ合うグループ対話を行った。その際，名札を置いてそれぞれの立場を明らかにし，相手の考えを聴きたいという気持ちを高められるようにした。両者の立場から選択理由を述べていく過程において，子どもたちは，どちらも相手のことを考えていることに気付いていった。

【名札を置いて対話する】

本実践においては，「言う」「言わない」という行動面での対立軸を明確にすることによって，子どもたちは，その理由となる多様な感じ方や考え方に接することができた。そして，対話を通して「相手を思う優しさ」という共通の価値を見いだしていったのである。

他の実践においても，落とし物を「届ける」「届けない」という対立軸や，公園の清掃を「する」「しない」という対立軸を明確にすることで，子どもたちは，黒板上に名札を置いて全体で対話を行いながら，異なる感じ方や考え方に接したり，その間で揺れ動く葛藤を感じたりすることができた。

次に示す実践も，対立軸を明確にしながら，視覚的に心の揺れ動きを捉えられるような支援を行ったものである。

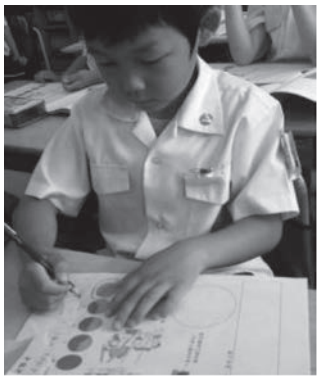
第１学年実践　「きまりをまもろう（４－（１））」

【資料名】「じゅんばん」（香川県小学校道徳教育研究会『なかよし』１年）

【本時のねらい】友達と気持ちよく過ごすために，決まりや規則を守ることが大切なことを理解させ，決まりや規則を守ろうとする態度を育てる。

【対立軸を明確にした対話の実際】資料は，遊具を独り占めして楽しんでいた主人公が，最後には独りぼっちになっていくというものである。主人公に自分を重ねながら，「自分が楽しみたい」「みんなと一緒に遊びたい」という二つの対立軸から気持ちを捉えられるようにした。そして，両者の気持ちの割合を，５種類の心情円盤から選択し，選択した理由を話し合えるようにした。

【五つの心情円盤】


【心情円盤を選択する】

また，視覚的に心の揺れ動きを捉える中で，対立軸を明確にし，その後の対話につなげていった実践を紹介する。

第４学年実践　「ありがとうの心（２－（４））」

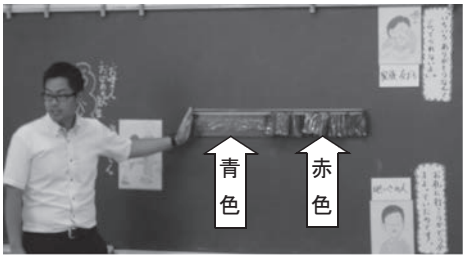
【資料名】「『ありがとう』の言葉」（香川県小学校道徳教育研究会『ともに生きる』４年）

【本時のねらい】日々の生活を支えてくれているさまざまな人々に，尊敬と感謝の念をもって接しようとする態度を育てる。

【対立軸を明確にした対話の実際】子どもたちは，家族や地域の人に対して感謝を伝えにくい理由を考え，心メーターを用いて対話を行った。心メーターとは，相手にありがとうと言って感謝を伝えようとする気持ちを赤色で，ありがとうと言いづらい気持ちを青色で表現し，両者の割合を視覚的に捉えやすくした物である。対話を通して，家族に対しては

「してくれて当たり前，照れくさくて言いづらい」という気持ちに，地域の人に対しては「親しくないので言いづらい」という気持ちに気付いていった。そこから，感謝を伝えるためには「感謝の気持ちを高める」「勇気を出す」という二つの軸があることを明確にした。それにより，どちらがより自分に必要かを考えていくことにつながった。

【心メーターに表す】



【心メーターで対立軸を明らかにする】

本実践では，ありがとうを言えるか言えないかという行動面での心の揺れ動きから，ありがとうと言えない理由は，家族や地域の方といった感謝を伝える対象によって違い，感謝を伝えるためにはそれぞれに「感謝の気持ちを高める」「勇気を出す」といった大切なことがあることを明らかにしていった。先の実践では，対立軸を明確にすることによって，多様な感じ方や考え方に接することができるようにしていったのに対し，本実践では，心の揺れ動きを表現する中で対立軸が明確になり，それぞれの価値に深く気付いていったと言えるだろう。

以上のことをまとめると，道徳の時間の授業において，多様な価値観に出合ったり，自分の考えを価値づけたりできるようにする支援の要件は次のようになると考える。

対立軸を明確にして選択を促す発問を行うことで，迷いを実感したり，多様な価値観を比較したりできるようにする。

2　評価方法の留意点

子どもの道徳性の評価については，小学校学習指導要領解説道徳編において，その意義が以下のように示されている。

…（前略）…一人一人の児童の道徳性が道徳教育の目標や内容を窓口として，どのように成長したかを明らかにするよう努めることが大切である。

つまり，道徳教育における評価は，教師が児童の人間的な成長を見守り，児童自身が自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し，それを勇気付ける働きをもつものであるといえる。それは，客観的な理解の対象とされるものではなく，教師と児童の温かな人格的な触れ合いやカウンセリング・マインドに基づいて，共感的に理解されるべきものである。

（文部科学省，『小学校学習指導要領解説道徳編』，2008年，124頁）

また，評価の基本的な態度として，次のようにも示されている。

…（前略）…その際大切にすべきことは，児童自身が自己の姿をどのように理解し，自己のよりよい生き方を求めていく意欲や努力をどのように評価しているかを児童の立場に即して理解しようとすることである。そうすることで，児童の意欲や努力をその内面から支えていくことが可能になるからである。

（前掲書，125頁）

道徳の時間の学びに対する評価は，活動の終わりに到達目標に達したかどうかを判断するために行うものではない。子どもが現在の自分の中にある道徳的価値に照らして自分を振り返り，よりよい基準をつくり続けていく過程であると言える。教師は，子どもの自己評価からその内面を理解するように努めるとともに，評価を基に指導を改善し，子どもが自己評価をさらに深めていけるようにすることが大変重要である。

その際，子どもたちが自己の道徳性の高まりを実感する上で，毎時間の授業を振り返ることのできる記録は重要である。例えば，道徳ノート等に，授業の最初に「自分の考え」を書き，授業の終末では「自己の振り返り」を書いて比較する。こうすることによって，自己の高まりを実感できるようになるのである。さらに，毎時間の授業を通して気付いた道徳的価値を，つないだり積み重ねたりしていくことも重要である。以前の授業の記録を振り返りながら次の授業に生かしたり，以前の学びから得た道徳的価値についてさらに深く理解したりしていくのである。このように毎時間の授業における気付きをつないだり積み重ねたりしていくことが，よりよい生き方を求めていく子どもたちの姿であると考える。

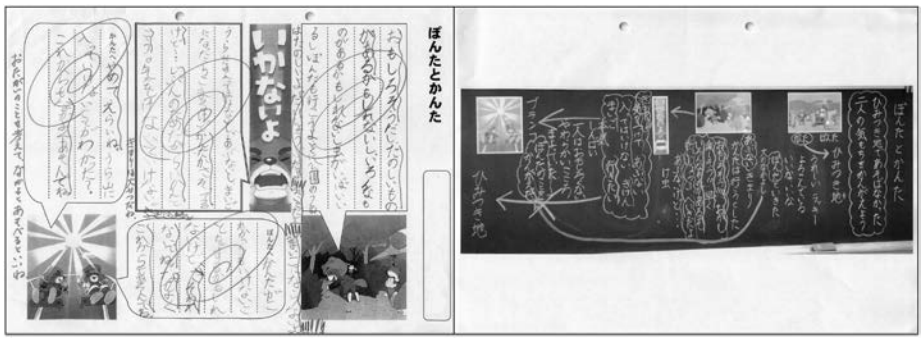
このような理由から，本校では，道徳ノート等によって記録を残し，評価に生かせるようにしている。では，道徳ノート等を用いて子どもたちがどのような自己評価を行い，どのように教師が勇気づけていくことが，子どもたちの自己評価をさらに深め，道徳性を高めていくことにつながるのであろうか。実践から見えてきた評価方法の留意点について以下に述べる。

子どもたちは，毎時間の授業を通して，さまざまな道徳的価値についての理解を深め，「これからは～したい」という道徳的実践意欲と態度を表現していく。そのような道徳的実践意欲と態度が，他の授業や生活の中で活用されることが，子どもの道徳性を高めていくことになると考える。

まず，第２学年における評価方法の工夫を紹介する。

毎時間のワークシートとともに，板書写真を道徳ファイルにとじ，いつでも振り返って確認できるようにした。例えば，「ぶらんこでのできごと」の学習を行っている際，「ぽんたとかんた」の学習を振り返り，「一人で遊んでもおもしろくないよ。みんなで仲よく遊べるように決まりを守ろう。」といった，その時の気付きを生かした発言があった。

このように，自分の考えたことが記されているワークシートとともに，そのような考えに至った経緯が分かる板書写真をファイルに残しておくことで，子どもたちはこれまでの学びを振り返り，これからの授業に活用していくことができるのである。



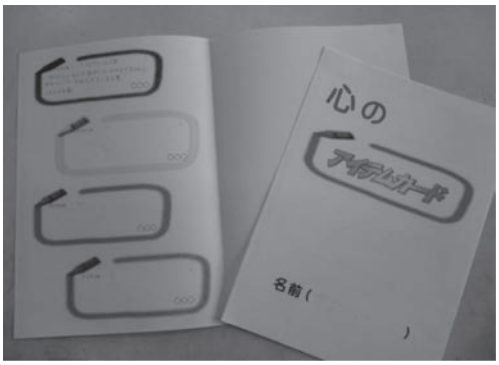
【道徳ファイルに，ワークシートとともに板書写真を残す】

これまでのワークシートと板書記録を振り返られるようにしておくことで，以前の学習において価値づけられた「決まりを守ろうとする道徳的実践意欲と態度」が，他の場面に活用されていると考えられる。教師が，このような子どもの姿を捉えて称賛することで，さらに子ども自身がこれまでの学習を振り返ったり，学んだことをこれからの授業や生活の中で活用していこうとしたりするようになるのである。

次に，それぞれの子どもが道徳的実践意欲と態度をカードに集約していった第４学年における評価方法の工夫を紹介する。

道徳的実践意欲と態度を集約する「心のアイテムカード」の作成を，すべての道徳の時間の学習を通じて行った。単に集約するだけではなく，それぞれの枠に○印を付け，実践した際には色を塗ることで，日常生活や道徳の時間に活用しようとしたか，子どもたち自身が確認できるようにした。例えば，「『ありがとう』は，自分も相手も，パワーがみなぎる言葉。手伝ってくれたら，すぐに『ありがとう』という」という道徳的実践意欲と態度を表している子どもがいた。このような道徳的実践意欲と態度を，いかに活用しているかを振り返り，教師が励ました。

そして，このような取り組みをすることで，例えば，「『まどガラスとさかな』でも学習したように…」と，以前の学習で養われた道徳的実践意欲と態度を活用しようとする意識が，子どもたちの中に生まれ始めたのである。このような活用を，教師は子どもに気付かせ，励ましていった。



【心のアイテムカード】

このように，道徳的実践意欲と態度を他の場面に活用できていることを，教師が励まし称賛するとともに，子ども自身が評価することで，道徳的実践意欲と態度がさらに育成され，道徳性の高まりにつながっていくものと考えられる。

毎時間の振り返りに加えて，さらに長期的に振り返ることも有効であると考える。なぜなら，それまでの学びを思い起こしながら，特に印象深い資料やその時に得た気付きなどを振り返ることで，現在の自分との関わりの中で，特に大切にしたい道徳的価値を深く理解できるからである。例えば，１学期間の道徳の時間の授業について学期末に振り返り，道徳ノートに記述できるようにするのである。実践から，「物を大切にすること」と「生命尊重」を主題とした二つの資料から学んだことを振り返りながら関連づけ，「すべての生き物の命や物を大切にする人になりたい」と，道徳的価値の自覚を深めている子どもが見られた。教師は，そのような子どものノートに称賛のことばを書き加え，励ましていったのである。このように，子どもが自己を見つめる機会を確保するとともに，これまでの道徳的価値の自覚をさらに深められていることを称賛することが大切である。今の自分にとって，どのような道徳的価値の自覚を深めることが必要であるのかを考えていくことは，自己の生き方を考えることにつながると考える。

最後に，本章で述べてきた「対話における支援の要件」と「評価方法の留意点」をまとめる。

○　対話における支援の要件

〈要　件〉

【体験・経験を生かして，自分と資料をつなぐために】

授業の中での体験的活動を生かしたり，写真や図等の利用といった視覚的な支援を行い，経験を想起させたりする。

【集団内の異なる立場の存在を明らかにするために】

アンケート等により，結果のプラス面とマイナス面の両方に留意しながら，集団内の異なる

立場の存在を明らかにする。

【多様な価値観に出合ったり，自分の考えを価値づけたりできるようにするために】

対立軸を明確にして選択を促す発問を行うことで，迷いを実感したり，多様な価値観を比較したりできるようにする。

○　評価方法の留意点

〈留意点〉

道徳的実践意欲と態度を他の場面に活用できていることを教師が励まし称賛するとともに，子ども自身が評価できるようにする。また，毎時間の振り返りとともに，長期的な振り返りも大切にする。

３　今後の課題

本校では昨年度から，道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深めるために，対話のある道徳の授業づくりに取り組んできた。そして，実践を通して対話における支援の要件をいくつか見いだしてきた。その中でも特に，自分の考えとは異なる立場の存在を明らかにしたり，対立軸を明確にしたりしながら異なる考えを大切にした対話を行うことが，多様な考え方や感じ方に触れるという点で有効であったと考える。一方で，対話を通して，学級集団の中に存在する自分と似ている考えに着目させ，自分の考えを価値づけたり強化したりしていくことも大切であると感じている。答えが一つではない道徳的な課題に対して，一人一人の考えを集団の中で吟味し，それぞれの価値観を磨き合い，高め合う授業づくりによって，子どもたちの道徳性を育めるよう，さらに研究を継続・発展させていきたいと考えている。

また，本年度は，子どもたちが自己の心の成長を実感できるような評価方法についても模索してきた。その中で，評価を行う際には，道徳的実践意欲を高め，態度を育むために，それらを他の場面に活用できていることを教師が励まし称賛する必要性や，自己の伸びを感じることができる子どもの自己評価の重要性が明らかになってきた。しかし，評価方法については，今まさに研究の一歩を踏み出したばかりである。今後，道徳の教科化にあたり，さらによりよい評価方法について探っていきたい。